

3-17. NPO 法人西表島エコツーリズム協会

(沖縄県八重山郡竹富町)

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

西表島は沖縄本島からさらに南西に約 430km に位置し、石垣島を中心とした八重山諸島に属する。面積は約 290km² (沖縄本島に次いで県内 2 位) で、亜熱帯気候、島嶼環境にあり、独自の生態系を有している。島の約 90% が森林で亜熱帯照葉樹林、マングローブ林に覆われている。

人口は約 2300 人で、主な産業は、農業 (さとうきび、米、パイン、マンゴー)、畜産業、漁業、観光業である。行政区分は八重山郡竹富町。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

今年 1 月に「奄美・琉球」が世界自然遺産暫定リストに掲載されることが決定し (現在保留中)、その対象地域の中に県内でも有数の自然資源を誇る西表島が入ることはほぼ確実である。10 年ほど前から地域でも度々話題にはあがってきた西表島の世界遺産登録が、ここに来て急速に現実味を帯びてきた。

近い将来の世界遺産登録への期待に、今年 3 月の新石垣空港開港も加わって、地域の観光業界は俄に浮き足立っているように見える。

しかし、落ち着いて現実目を見てみると、新空港開港によって西表島にもたらされたのは、主に石垣島からの「日帰り」観光客の増加で、島に及ぼす経済効果は限定的である。日帰りでも手軽に大自然の中でのカヌーやトレッキングが楽しめるとあって、近年、日帰り (エコ) ツアーの需要が高まり、ツアー事業者の増加に歯止めがかからない一因ともなっている。現在、ツアー事業者の数や、年々拡がりを見せる利用フィールドの範囲などは、正確に把握されておらず、現状のまま世界遺産に登録されて観光客が押し寄せた場合に、環境への負荷や地域住民の生活への影響が心配される。

ガイド認定制度の導入やゾーニング、利用と保全のルールや仕組みづくりの必要性は、以前から提唱されているが、なかなか進展がみられない。最短で 3 年後の世界遺産登録の可能性が出てきた今、これらの整備を急ピッチで、しかし丁寧に進めていく必要があると考える。

それらの取組を進めるにあたって、世界遺産に登録されて 20 年となる屋久島の事例からヒントを得たい。



(2) アドバイザー派遣実施の概要

日 時	平成 25 年 11 月 16 日（土）～平成 25 年 11 月 17 日（日）
場 所	視察場所：島内のエコツアーフィールド、観光スポット、エコツアー関連施設 （仲間川周辺、野生生物保護センター、由布島、星砂海岸、浦内川、祖納集落、 西表島エコツアーリズムセンター） 講演実施会場：中野わいわいホール
アドバイザー	有限会社屋久島野外活動総合センター 代表取締役 松本 毅 氏
参 加 者	<p><島内視察参加者> 西表島エコツアーリズム協会会員</p> <p><講演／パネルディスカッション参加者></p> <p>【司会進行】 竹富町商工観光課 主任 通事太郎</p> <p>【パネリスト】 西表島エコツアーリズム協会 会長 石垣昭子 西表世界自然遺産研究委員会 委員長 中神明 西表パイン園 代表 川満弘信 環境省西表自然保護官 福田真</p> <p>【参加者】 竹富町議会議員、西表島エコツアーリズム協会会員、竹富町ダイビング組合員 3 名、 西表島カヌー組合員 2 名、環境省西表自然保護官事務所職員 2 名、 九州森林管理局西表森林生態系保全センター職員 2 名、その他島内の観光従事者、 地域住民など 計 30 名程度</p>
スケジュール・方法	<p>【1 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> 視察 仲間川周辺、野生生物保護センター、由布島、星砂海岸、浦内川、祖納集落 意見交換（竹富町議会議員、住民らと） 講演とパネルディスカッション 講演「世界自然遺産を考える～屋久島の事例から～」 屋久島が世界遺産に登録されてからの様々な変化や、発生した問題とその対策、取り組まれてきたガイド制度、利用と保全の仕組み作りなどの事例や、現在抱えている課題などをお話しいただいた。（40 分） パネルディスカッション 地域の 4 名のパネリストから世界自然遺産登録に向けてそれぞれの立場で取り組まれていることや考えを発表いただき、それに回答する形式でアドバイスをいただいた。（40 分） <p>【2 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> 観光従事者との意見交換

(3) アドバイスの内容

●講演

「世界遺産 20 周年を迎えて」と題して、屋久島が世界遺産に登録されてからの観光客数の推移や観光形態の変化、ガイド認定制度の取り組み、入域制限の仕組み、保全のための財源確保の手法などについて、わかりやすくお話しいただいた。

○観光客の増加とそれに伴う島の変化

観光客数、宿泊者数共に増加し、それに伴いガイドなどの観光関係事業者も増加した。世界遺産登録以降、人口の減少には歯止めがかかっている状態である。

○「屋久島ガイド」登録・認定制度

ガイドの急増による質の低下を防ぐために、ガイド自らが協議会を立ち上げ、話し合える場がつけられた。その後エコツーリズム推進協議会が発足し、「屋久島ガイド」登録・認定制度がつけられた。よりハードルを高くしたり、観光客に周知するための見直しが検討されている。

○立ち入り制限

観光客が集中するフィールドへの立ち入り規制（利用調整）を設ける検討がされている。立ち入り制限には自然環境重視・観光振興重視・利用環境重視の考え方がある。

○環境保全のための財源

し尿処理や山岳救助にかかる費用を確保するために保全募金制度を取り入れている。しかし十分ではないため、新たな財源の確保が課題である。



講演会



パネルディスカッション



視察（由布島）



視察（祖納）

●パネルディスカッション

4名のパネリストに、世界遺産登録に向けてそれぞれの立場で進めていること、考えていることを発表していただいた。

○川満弘信

農業の振興は観光と共に地元経済の基盤になり得ると考えている。世界遺産に向けては産業間が連携して受入体制を整えていきたい。

○中神明

世界遺産登録に向けて、行政の取り組みを待っているだけではだめだと思い、観光協会の中で世界遺産研究委員会を発足させた。予算があるわけでもなく、具体的な活動内容もまだ決まっていないが、まずは観光事業者の声をひろいあげていくことが重要だと考えている。

○福田真

国立公園は、保護と利用の両者が必要であり、西表島としてはどのように両立していくのが望ましいのか、地域住民と共に検討していきたい。

○石垣昭子

西表島が置かれるであろう状況を先行して経験されている屋久島の事例は大変興味深く、勉強になる。何百年もの歴史を築き上げてきた島人が、老若男女問わず一体となって考え、取り組んでいくべきだと思う。それには歴史や文化の継承も不可欠だと思う。

○松本毅

保護・規制も利用も、議論していく上で様々な立場からの意見や都合があるだろうが、常に利用者である観光客の視点が大切で、そこが抜けおちてしまわないようにしなければならないと思う。

また、保護と利用の形態は様々であり、このすばらしい風景や生物多様性など、他にはない「西表らしさ」を保護することは不可欠であると思う。屋久島とはまた異なった形態となるべきだと思うが、それをみなさんが話し合い、協議を重ねて、導き出してほしいと思う。

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・屋久島での世界遺産登録後の変化や現状を知り、同じ島嶼環境にあり共通点も多いことから、西表島で起こりうる変化を想定でき、参考になった。また、それに向けて必要な取り組みを探るきっかけとなった。
- ・屋久島で、現在進行形で時代と共にその状況に応じた検討・対策がされていることを知り、保全と利用のバランスを保ち続けるためには、世界遺産登録の前後だけではなく、常に行政・民間の協議が必要であることを認識した。
- ・行政が主導しないとできないこともあるが、ガイドや観光事業者らが問題に感じていることに対して、自ら取り組んでいけることもあるということを知った。
- ・他地域の事例を参考にしつつ、それと同じではない「西表らしさ」を追求した形をつくりあげていくことが大切だと認識した。
- ・観光事業者だけでなく地域全体の問題として、様々な主体間で情報を共有し、できるだけ多くの情報共有の場、話し合いの場をもっていくことが不可欠だと感じた。
- ・今回初めて役場職員が司会進行をつとめ、民間・行政が共に考える場をつくる第一歩となった。

●今後の期待される効果

- ・行政が具体的な取り組みを始める前に、ガイド、ダイビング事業者、宿泊施設など、それぞれの業種内で、問題を認識したり、ビジョンを描いたり、それぞれにできる準備が進められていくことが期待される。
- ・観光協会の世界自然遺産研究委員会の活動内容を決めていくにあたっての参考となり、今後の有意義な活動が期待される。

●今後の取り組み

- ・地域では、全体的に世界遺産登録に関する情報が不足していると感じるため、まずは今回と同じような地域住民が勉強できる機会を継続して設けていき、その中でのエコツーリズムの重要性をより多くの住民に知っていただきたいと考えている。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

世界遺産登録後 20 年が経過して、今なおガイド登録制度の見直しや縄文杉への立ち入り制限について議論が続けられている屋久島の事例から、世界遺産に登録される、されないに関わらず、保全と利用の最善のバランスを保ち続けるためには、常に行政・民間が議論をし、対策していかなければならないということを改めて感じた。現在の西表島では、話し合い・協議の場がほとんどもたれていないのが現状であるが、行政の動きをただ待つのではなく、民間から起こせる（現場にいるからこそ起こせる）アクションもあるということを感じた観光事業者もいたようである。

世界遺産登録という地域住民の関心が高まっているこの機を、これまで観光事業者だけのものだと思われがちであった「エコツーリズム」を地域に浸透させる好機と捉え、推進をしていきたい。

●その他感想

アドバイザーの松本氏が「屋久島より若者が多く、とても活気がある」と言われたのが意外であったが、その言葉に自分たちの可能性を感じることができた。先人たちが苦勞をして切り開いてきたこの島で、先人たちが大切にされてきた宝（自然・文化）をしっかりと受け継ぎながら、若者のパワーを集結させて、西表島の未来をつくりあげていければと改めて感じた。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

有限会社屋久島野外活動総合センター 代表取締役 松本 毅 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

2013年1月に「奄美・琉球」が世界自然遺産の暫定リストに加えられ、2016年には自然遺産としては日本で5番目の登録となるのが有力となってきた。世界遺産登録による観光客の増加、観光形態の変化、それに伴う新たな問題の発生に対して島民の期待と不安が高まってきている。そのような状況の中で、世界遺産20周年を迎えた屋久島の事例を報告し、それに向けた対策の議論を進めていく必要がある。

しかし、東部の大原地区は、石垣島からの日帰りツアーが主流であるのに対し、西部の上原地区は、民宿・ホテルなどの宿泊を伴うツアーが主流となり、観光の形態が違うことから、エコツーリズムにたいする共通認識を持つことが難しいと思われる。

また、新たなツアー事業者の増加に伴い、ツアーガイド間での自主ルールの徹底が難しくなっている。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

サンゴ礁のリーフから汽水域のマングローブを経て、内陸部へつながる自然環境の変化をスノーケリング、カヌーや遊覧船、トレッキングで見ることができる。また、それらの自然資源を活用してきた生活・文化があり、今現在も受け継がれてきていることは、非常に貴重なことである。

●アドバイス（講義等）の概要

世界遺産登録20周年を迎えた屋久島において、観光客の増加、観光形態の変化、ガイドの増加、自然環境への影響などについて事例を報告した。

特に、ガイドの増加に伴う「屋久島ガイド」登録認定制度の仕組み、入山規制に関する考え方、財源の確保に関する現在の取り組みに関して報告をした。

しかし、観光の熟成度によって状況は変化し続けるものであり、常に行政・民間が議論をして対応してかなければならない。

●全体構想への取組状況・意向について

現在、西表島においてエコツーリズム推進法における全体構想の取り組みはなされていない。全体構想に関しては、環境省・沖縄県・竹富町の行政の取り組みが不可欠であり、今後行政と民間との協議が必要と思われる。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

世界遺産登録にともなう期待と不安がある一方で、住民にとって情報が不足している。現状の分析と今後起こりうることを想定した対策の議論が必要と思われる。今回、上原地区の西表島エコツーリズム協会の主催する「島人文化祭」に参加をさせていただき、住民の連携が非常にうまくいっている印象を持った。特に若い人を中心に地域の活力が感じられた。今後、行政を交えた議論の場を十分に設けて、西表島の未来を大いに語り合っていたいただきたいと思います。

その際に、世界遺産の称号はあくまでも西表島の自然が世界の宝であるという認識のもので、利潤追求に走ることなく、未来永劫守っていく使命を課せられたという認識を忘れないでいただきたいと願う。そのためには、その地域が活力を失わないよう経済的な安定とともに行政の十分な支援と自然の素晴らしさを共有するたくさんの

来島者が必要となる。エコツーリズムとは、地域住民と行政と来島者が共通の認識を持ち、自然資源の保全と活用のバランスをとることといえる。

西表島エコツーリズム協会がその中心となって活躍されることを期待する。

今回は、参加者の方々と十分に意見交換をする時間がなかったのは残念でしたが、文化祭に参加させていただき、郷土芸能が本当に地域に根ざしていることを知ることができました。とてもいい機会に呼んでいただいたことを事務局の方々に感謝しています。